

## 『陔餘叢考』 訓譯卷十二之上

中 林 史 朗  
大 兼 健 寬  
新 名 主 考 美  
關 清 孝

今回は第十二卷五篇中の長文である一篇と二篇とを登載させて頂く事とした。

十二卷中の短文である四篇と五篇とは、既に二年前に公刊（卷十一・十二之下）させて頂き、十二卷の残りは、長文の一篇・二篇・三篇の三本を残すのみで、今回はこの残り三本を搭載する豫定ではあったが、筆者の怠惰さに因る原稿整理の遅延等々諸般の事情から一・二篇のみとし、如何ながら残りの三篇は次回に回して頂かざるを得なくなった。

この作業に着手して略二十年弱の歳月が流れ、現在は卷十八を讀解中であるが、今まで實際公刊したものは『陔餘叢考』全四十三卷中の略四分の一を超え、數年後には三分の一を超える事になる。然りと雖も其の進捗状況たるや誠に遅々たる歩みで、甚だ慚愧に堪えないものがある。

しかし、問題なのは筆者の老化現象と参加者の減少で、現在の参加者は、現職講師一人とオーバードクター一人を中心に、大学院博士課程一人・學部四年生二人・三年生一人と言う、僅か六人のメンバーと、時たま忘れた頃に顔を覗か

せる、此の讀書會のマスコットガールとでも言うべき、漢文讀解力は可成り高いものの、何處か氣樂で氣ままで氣まぐれな酒豪の某女史とで、毎週細々と讀み進めている狀況で、誠に寂寥感漂う讀書會と成っている。

更に問題なのは、筆者の記憶力と讀解力の減退（老化現象）と、嘗て擔當された諸士が學窓を離れて數年以上經ち、原稿整理がなかなか容易ではなくなって來た、と言う現状が控えていると言う事である。

かく雖も、一度始めた作業であれば、例え代表が替わっても（數年後には代替わりをする豫定）、全卷讀了を目指して突き進んでゆく覺悟であれば、先賢諸英の御指導・御指教を切に請う所である。

この卷十二の上を擔當された諸士は、大兼健寛（現、オーバードクター）・新名主考美（現、神奈川縣立横濱南養護學校非常勤講師）・關清孝（現、伊奈學園總合高等学校教諭）の三人（五十音順）である。

平成二十六年季秋

識於黃虎洞

『陔餘叢考』訓譯卷十二之上

【原文】

1 新唐書列傳内所增事蹟較舊書多二千餘條其小者不必論其有必不可不載而舊書所無者今撮於後

楊貴妃傳舊書不載其先爲壽王妃事但云武惠薨後庭無當意者或言楊元琰女有色乃召見妃衣道士服號曰太眞帝大悅云云新書補之謂帝令自出妃意巧爲女官號太眞更爲壽王聘韋昭訓女〔舊書蓋國史舊文故有隱諱也〕

憲宗郭皇后歷穆宗敬宗文宗武宗爲太后及宣宗即位宣宗母鄭氏本后侍婢有宿怨故宣宗奉后禮稍薄后鬱鬱不自聊登樓將自殞

左右共持之乃免帝聞不喜是夕后暴崩是后之不得善其終也通鑿載之甚詳而舊書則謂宣宗繼統恩禮愈隆於前朝大中年崩於興慶宮是全沒其實矣新書詳載其暴崩之事較爲得實又后崩後太常王暉請合葬於憲宗陵宣宗不悅令宰相白敏中讓之暉曰后乃憲宗東宮時元妃順宗子婦歷五朝母天下不容有異論事遂定此亦當時一大事乃舊書亦不載

韓王元嘉傳新書增武后詔諸宗室朝明堂元嘉遣告諸王謂大享後必盡誅諸王不如先事起於是瑯琊王冲卽發兵起此亦武后朝一大事也舊書不載

蘇良嗣傳良嗣爲相時遇薛懷義於朝頗偃蹇良嗣怒叱左右批其頰曳去武后聞之戒懷義曰師弟出入北門彼南衙宰相行來毋犯之此亦見武后之淫毒而仍能用止人舊書乃不載新書補之

曹王明傳其母本巢刺王妃太宗欲立爲后魏徵諫而止此見太宗開國之初內行有缺其後唐家累以色荒未必不由此舊書不載新書補之

懿德太子重潤傳高宗立重潤爲皇太孫裴敬彝王方慶以爲晉立潛懷子爲皇太孫齊立文惠子爲皇太孫皆居東宮今既有皇太子又立皇太孫於古無例此議足爲後世法舊書不載新書補之

狄仁傑傳武后欲以武三思爲皇太子仁傑力言人心未厭唐匈奴犯邊使三思募兵踰月無應者廬陵王代之不洩曰輒五萬后怒罷議後又與王方慶因論雙陸力言姑姪不如母子之親以悟后遂迎廬陵此見仁傑之忠於唐舊書不載新書補之

王綝傳李德裕稱王方慶「卽綝」爲相時其子爲眉州刺史武后曰君在相位何子之遠對曰廬陵是陛下子今尙在遠臣之子何敢相近欲以感悟后此亦見綝之忠於唐舊書不載新書補之

桓彥範傳敬暉桓彥範等斬張易之後后令太子還宮彥範曰太子不可再歸陛下應傳位太后乃臥不復言中宗由是復位此廬陵復位時一大事舊書不載新書補之

姚崇傳元宗欲相崇崇先以十事邀說此乃相業之始後來功勳俱自此立舊書竟不載新書補之

宋璟傳新書增郝靈佺出使斬默啜首以獻環恐天子喜邊功抑之不擢此見環之識大體舊書不載新書補之良有意也又增後來張嘉貞爲相閣堂案見環危言切論未嘗不失聲太息此尤見環之生平

李林甫傳林甫有堂如偃月欲構陷人卽入而思所以中傷者若喜而出則其家碎矣又諭諸言事者曰立仗馬終日無聲馭三品料一鳴卽斥矣由是諫疏絕此皆老奸狡惡之跡舊書不載新書增之按舊書謂林甫無文學嘗讀杖杜爲杖杜寫弄璋爲弄璋此等碎事既詳之而偃月堂立仗馬等事反不載何也新書於杖杜弄璋反刪之以所重不在此也可謂得要矣

劉晏傳新書增其辭永王璘之官璘反時晏守餘杭力拒之及晏被籍後惟雜書兩乘米麥數斛此有關晏之品行舊書不載

田神功傳神功初受祿山僞官後率衆歸朝又以兵敗降於史思明既又自拔歸舊書全不載竟似未嘗失身於賊者新書補之

段秀實傳新書增郭晞軍士縱暴秀實斬十七人及大將焦令謨責農租秀實賣馬代償令謨愧死二事皆舊書所無按此出柳宗元所記段太尉逸事狀謂之逸事必是國史所本無者宗元蓋嘗見國史本傳故另作狀以著之由此以推可見舊書全抄國史原本新書則參考他書成之亦見子京用功之深也

盧杞傳杞以私憾陷顏真卿使於李希烈被害又崔甯以播遷咎杞杞卽誣甯反帝殺之此等事正見杞之奸惡舊書不載新書補之

鄭注傳中丞王守澄死以十一月葬注奏言願入護喪實欲俟羣閹送喪以鎮兵悉擒誅之李訓畏注專其功乃先五日舉事遂有甘露之變此等大事乃舊書不載新書補之

龔王滋傳昭宗命滋領侍衛諸軍帝將幸太原韓建邀次華州惡諸王將兵誣以他語遂罷其兵柄使歸十六宅矯詔以兵圍而殺之凡十一王此何等事舊書竟不載新書書於此

朱玫傳宰相蕭遘密召玫迎帝玫趨鳳翔田令孜劫帝走玫追不及乃立襄王煊此何等事舊書不著其詳新書補之

仇士良傳甘露變後士良恣橫益甚劉從諫以李訓所移誅宦官書騰於朝請王涯等罪名欲以死清君側累指士良等罪惡文宗倚其言差自強士良憤文宗與訓注同謀夜半命直學士崔慎由草廢立詔引至帝所面數帝過失帝俛首而已慎由以死自誓士良曰不爲學士

不得更坐此送慎由出曰毋泄禍及爾族慎由記其事藏篋中將沒以授其子緇郎故緇郎終與朱全忠盡誅宦官也士良請老還第中人送之士良戒以事天子不可令閒暇觀書史見儒臣但以聲色狗馬惑其心而已此數事皆當時闇禍可垂戒後世者舊書不載新書增之田令孜傳令孜擅權所爲不法拾遺侯昌黎劾之反賜死黃巢之亂令孜導帝幸蜀賞勞不及黃頭軍軍將變帝與令孜保車城自守拾遺孟昭圖上疏宜與宰相群臣共安危令孜矯詔貶昭圖使人沉之於江楊復光之黨曹知愨遣人入長安攻賊營帝將還知愨擁衆散關欲閹群臣可歸者納之令孜忌之密令王行瑜以兵襲殺其衆令孜又募新軍以千人爲都凡五十四都分左右爲十軍統之此皆令孜罪舊書不載新書補之

來俊臣傳俊臣子誣樊戡以謀反誅戡子訴闕下不得奏因自刎腹死上巳日俊臣與其黨集龍門題指紳名於石抵而仆者先告抵李昭德不中昭德知之乃令衛遂忠發其姦言自比石勒欲告皇嗣及廬陵王與南北衛謀反方俊臣用事託天官選者二百餘員及敗有司自首武后詰之對曰亂陛下法身受戮忤俊臣覆臣族並皆見俊臣之惡舊書不載新書補

顏泉明傳顏泉明之子泉明先從泉明客壽陽史思明獲之械送幽州閒關得免後爲郟令遷彭州司馬皆有善政孤藐相從百口飢粥不給無悔嘆此忠臣之後之能世其家者舊書不載新書補之

### 【書のトコ】

新唐書列傳内に増す所の事蹟は、舊書に較べ二千餘條多し。其の小なる者は、必ずしも論せず、其の必ず載せざる可からずして舊書に無き所の者有れば、今後撮る。

楊貴妃傳、舊書は其の先壽王の妃に爲るの事を載せずして、但だ「武惠薨じ、後庭に意に當る者無し。或ひと楊元琰の女に色有りと云ふ。乃ち召見す。妃は道士の服を衣、號して太眞と曰ふ。帝大いに悦ぶ。云云」と云ふのみ。新書は之に補ひて、「帝は自ら妃の意は女官に爲ることを巧むるを出さしむ。太眞と號して、更に壽王の爲に韋昭訓の女を聘ら

す」と謂ふ。「舊書は蓋し國史の舊文、故に隱諱有るなり。」

憲宗の郭皇后。穆宗・敬宗・文宗・武宗を歴し太后爲り。宣宗即位するに及び、宣宗の母鄭氏本より後の侍婢、宿怨有り。故に宣宗の后を奉りし禮稍や薄し。后鬱鬱として自聊せず、樓に登り將に自殞せんとし、左右共に之を持し乃ち免がる。帝聞きて喜ばず。是の夕后暴崩す。是れ后の其の終を善くするを得ざるなり。通鑿之を載すこと甚だ詳かなるも舊書は則ち「宣宗統を繼ぐや、恩禮愈よ前朝より隆く、大中の年、興慶宮に崩す」と謂ふ。是れ其の實を全没す。新書は其の暴崩の事を詳載し、較ぶる實を得ると爲せり。又太后崩じて後、太常王暉 憲宗陵に合葬するを請ふも、宣宗悅ばず、宰相白敏中をして之を讓めしむ。暉曰く、「后乃ち憲宗東宮の時の元妃、順宗の子婦、五朝を歴て天下に母たるは、異論有るを容れず」と。事遂に定む。此れ亦た當時の一大事なり。乃るに舊書は亦た載せず。

韓王元嘉傳、新書は「武后 諸宗室に詔して明堂に朝せしむ。元嘉 遣はして諸王に告げしめて謂く、『大享の後、必ず盡く諸王を誅さん。事に先んじ起くるに如かず』と。是に於て瑯琊王沖 即ち兵を發して起く」を増す。此れ亦た武后朝の一大事なり。舊書は載せず。

蘇良嗣傳、良嗣 相爲りし時、薛懷義に朝に遇ふ。頗る偃蹇なり。良嗣怒り、左右を叱して其の頰を批たせ、曳きて去らしむ。武后之を聞き、懷義を戒めて曰く、「師弟は北門より出入せよ。彼の南衙宰相の行來は、之を犯すこと母かれ」と。此れ亦た武后、之淫毒なるも仍を能く正人を用ふるを見す。舊書は乃ち載せず。新書は之を補ふ。

曹王明傳は、其の母は本と巢刺王の妃なるも、太宗立てて后と爲さんと欲す。魏徵 諫めて止む。此れ太宗 國を開くの初、内行に缺有るを見す。其の後、唐家 累りに色を以て荒るるは、未だ必ずしも此れに由らずんばあらず。舊書 載せず。新書 之を補ふ。

懿德太子重潤傳。高宗 重潤を立て皇太孫と爲す。裴敬彝・王方慶以て「晉は潛懷の子を立て皇太孫と爲し、齊は文惠

の子を立て皇太孫と爲し、皆な東宮に居らしむ。今既に皇太子有り、又た皇太孫を立てるは古に例無し」と爲す。此の議後世の法と爲すに足る。舊書は載せず、新書は之を補ふ。

狄仁傑傳に、「武后 武三思を以て皇太子と爲さんと欲す。仁傑力めて『人心未だ唐を厭はず。匈奴邊を犯す。三思をして兵を募らしむるも、蹶月 應ずる者無し。廬陵王之に代はりて、浹日ならずして、輒ち五萬』と言ふ。后怒りて、議を罷む。後に又、王方慶と雙陸を論ずるに困りて力めて『姑姪は母子の親きに如かず』と言ふ。以て后を悟らせ、遂に廬陵を迎ふ」と。此れ仁傑の唐に忠たるを見す。舊書は載せず。新書は之を補ふ。

王綝傳、李德裕は、「王方慶〔即ち綝〕相爲りし時、其の子を眉州刺史と爲す。武后『君相位に在るに、何ぞ子を之れ遠ざくるや』と曰ふ。對へて『廬陵は是れ陛下の子なるに、今尙ほ遠くに在れば、臣の子何ぞ敢へて相ひ近くせんや』と曰ひ、以て後に感悟させんと欲す」を稱す。此れも亦た綝の唐に忠たるを見す。舊書載せず。新書之を補ふ。

桓彥範傳。敬暉・桓彥範等 張易之を斬りて後、后 太子をして宮に還らしめんとす。彥範曰く、「太子再び歸すべからず。陛下應に位を傳へるべし」と。太后乃ち臥せて復た言はず。中宗是に由り復位す。此れ廬陵復位せし時の一大事なり。舊書は載せず、新書は之を補ふ。

姚崇傳、元宗 崇を相にせんと欲す。崇 先ず十事を以て説を邀む。此れ乃ち相業の始めなり。後來の功勳は、俱に此れ自り立つ。舊書 竟に載せず。新書 之を補ふ。

宋璟傳は、新書「郝靈佺 出使し、默啜の首を斬り、以て獻す。璟 天子の邊功を喜ぶを恐れ、之を抑へて擢かず」を増す。此れ璟の大體を識るを見す。舊書は載せず。新書は之を補ふは、良に意有るなり。又「後來の張嘉貞 相爲りしとき、堂案を閲し、璟の危言切論を見て、未だ嘗て失聲・太息せずんばあらず」を増す。此れ尤も璟の生平を見す。

李林甫傳。林甫に堂有り、偃月の如し。構へて人を陥さんと欲せば即ち入りて中傷する所以の者を思ふ。若し喜びて出

づれば、則ち其の家碎かる。又た諸々の事を言ふ者を諭して、「仗に立つ馬終日聲無きも、三品の料に飢き一たび鳴けば即ち斥かる」と曰ふ。是に由り諫疏絶ゆ。此れ皆な老奸稔惡の跡なり。舊書は載せず、新書は之を増す。按ずるに舊書は林甫に文學無く、嘗て「杖杜」を讀み「杖杜」と爲し、「弄璋」を寫し「弄璋」と爲すを謂ひ、此等碎事は既に之を詳かにす。而るに「偃月堂」「立仗馬」等の事は反て載せざるは何ぞや。新書は「杖杜」「弄璋」に於ては反て之を刪る。重んずる所此に在らざるを以てすればなり。要を得ると謂ふべし。

劉晏傳、新書は「其れ永王璘の官するを辭す。璘反する時、晏餘杭を守り、力めて之を拒ぐ。晏籍せらるる後に及び、惟だ雜書兩乘米麥數斛のみ」を増す。此れ晏の品行に關る有り。舊書は載せず。

田神功傳の「神功初め祿山の僞官を受くるも、後に衆を率る朝に歸す。又兵を以て敗れ、史思明に降る。既に又自ら抜き歸す」は、舊書の全く載せず。竟に未だ嘗て身を賊に失はざる者に似る。新書は之を補ふ。

段秀實傳。新書は郭晞の軍士暴を縱まし秀實十七人を斬ること、及び大將焦令謨農租を責め秀實馬を賣り代償し、令謨愧ぢて死することを増す。二事皆な舊書の無き所なり。按ずるに此れ柳宗元の記す所の段太尉逸事狀より出づ。之を逸事と謂へば、必ず是れ國史の本づく所に無き者なり。宗元蓋し嘗て國史本傳を見、故に另に狀を作り以て之を著す。此に由り以て推せば、舊書は全て國史の原本を抄し、新書は則ち他書を參考し之を成すを見るべし。亦た子京の用功の深きを見すなり。

盧杞傳に、「杞私憾を以て顔眞卿を陥るるに、李希烈に使ひせしむ。害せらる」と。又、「崔甯播の遷を以て杞を咎む。杞即ち甯反すと誣ふ。帝之を殺す」と。此等の事は、正に杞の奸惡を見す。舊書は載せず。新書は之を補ふ。

鄭注傳に「中丞王守澄死し、十一月を以て葬る。注奏じて『願はくは入りて喪を護らん』と言ふ。實に羣阬の葬を送るを俟ちて、鎮兵を以て悉く之を擒誅せんと欲す。李訓は注の其の功を專にするを畏れ、乃ち五日に先んじ事を擧げ、



遂に甘露の變有り」と。此等は大事なるに、乃るに舊書は載せず。新書は之を補ふ。

夔王滋傳。昭宗・滋に命じ侍衛諸軍を領せしむ。帝將に太原に幸せんとし、韓建華州に邀次し、諸王の兵を將ふるを惡み、誣するに他語を以てし、遂に其の兵柄を罷め十六宅に歸らしむ。詔を矯げ兵を以て圍みて之を殺す。凡そ十一王なり。此れ何等の事ぞ。舊書は竟に載せず、新書は此に書す。

朱玫傳、宰相蕭遘密かに玫を召して帝を迎へしむ。玫鳳翔に趨くも、田令孜帝を劫して走げしむ。玫追ふも及ばず、乃ち襄王煊を立つ。此れ何等の事ぞ。舊書は其の詳を著さず。新書は之を補ふ。

仇士良傳に「甘露の變の後、士良横を恣にすること益々甚し。劉從諫李訓の宦官を移し誅する所の書を以て朝に騰げ、王涯等に罪名を請ひ、死を以て君側を清めんと欲し、累りに士良等の罪惡を指しめす。文宗其の言に倚りて差しく自強す。士良文宗の訓・注と同一に謀るを憤りて、夜半、直學士崔慎由に命じて廢立の詔を草せしめ、引きて帝所に至り、面ひて帝の過失を數む。帝首を俛るのみ。慎由死を以て自ら誓めんとするに、士良『學士爲らざれば、更に此に坐るを得ず』と曰ふ。慎由を送るに出でて『泄すこと母かれ。禍爾が族に及ばん』と曰ふ。慎由其の事を記し篋中に藏す。將に没せんとするに以て其の子緇郎に授く。故に緇郎終に朱全忠と盡く宦官を誅す。士良老を請ひ第に還らんとするに、中人之を送る。士良戒むるに『天子に事ふるに、閑暇に書・史を觀、儒臣を見しむ可からず。但だ聲色狗馬を以て其心を惑わすのみ』を以てす」と。此の數事は皆當時の闖禍の後世に垂れ戒しむる可き者なるに、舊書は載せず。新書は之を増す。

田令孜傳。令孜權を擅まにし爲す所法あらず。拾遺侯昌蒙之を劾すも反て死を賜ふ。黃巢の亂、令孜帝を導き蜀に幸せしむも、賞勞黃頭軍に及ばず。軍將に變せんとし、帝令孜と車城に保し自守す。拾遺孟昭圖、「宜しく宰相群臣と共に安危すべし」と上疏す。令孜詔を矯げ昭圖を貶め、人をして之を江に沉せしむ。楊復光の黨曹知愨人をして長安に入

り賊營を攻めしむ。帝將に還らんとし、知愨衆を散關に擁し、群臣の歸すべき者を聞し之を納めんと欲す。令孜之を忌み、密かに王行瑜に令し兵を以て其の衆を襲殺せしむ。令孜又た新軍を募り千人を以て都と爲し凡そ五十四都あり、左右に分け十軍と爲し之を統ぶ。此れ皆な令孜の罪なり。舊書は載せず、新書は之を補ふ。

來俊臣傳、俊臣の子樊戩を誣ふるに、謀反を以て誅し、戩の子闕下に訴ふるも、奏することを得ず。因りて自ら腹を割きて死す。上巳の日、俊臣其の黨と龍門に集まり、搢紳の名を石に題し、抵げて仆るる者先ず告げ、李昭徳に抵ぐるも中らず。昭徳之を知り、乃ち衛遂忠をして其の姦を發せしむ。自ら石勒に比し、皇嗣及び廬陵王南北の衛と謀反せんと告げんと欲すと言はしむ。俊臣事を用ふるに方り、天官に託して選す者二百餘員。敗るるに及び、有司自首し、武后之を詰り對へて曰く、「陛下の法を亂さば身は戮を受け、俊臣に忤はば臣族を覆さる」と。並びに皆俊臣の惡を見す。舊書は載せず。新書は補ふ。

顔泉明傳の「顔杲卿の子泉明、先づ杲卿賊を討つも、杲卿敗るるに従り、泉明壽陽に客たり。史思明之を獲て、械し幽州に送る。間關なれば免がるるを得」・「後に鄆の令と爲り、彭州司馬に遷り、皆善政有り。孤藐相ひ百口に從り、飡粥給はざるも、悔嘆無し」は、此れ忠臣の後を之れ能く其の家を世にする者なるも、舊書は載せず。新書は之を補ふ。

### 【語注】

○其の先：—『舊唐書』卷五十一玄宗楊貴妃傳に「開元初、武惠妃特承寵遇、故王皇后廢黜。二十四年、惠妃薨、帝悼惜久之。後庭數千、無可意者。或奏玄琰女姿色冠代、宜蒙召見。時妃衣道士服、號曰太眞。既進見、玄宗大悅。不期歲、禮遇如惠妃。太眞姿質豐艷、善歌舞、通音律、智筭過人。每倩盼承迎、動移上意。宮中呼爲娘子、禮數實同皇后」と有

る。○帝自ら……『新唐書』卷七十六楊貴妃傳に「幼孤、養叔父家。始爲壽王妃。開元二十四年、武惠妃薨、後廷無當帝意者。或言妃姿質天挺、宜充掖廷、遂召內禁中、異之、卽爲自出妃意者、丐籍女官、號太眞、更爲壽王聘韋昭訓女、而太眞得幸。善歌舞、邃曉音律、且智算警穎、迎意輒悟。帝大悅、遂專房宴、宮中號娘子、儀體與皇后等」と有る。○通鑑之を載……『資治通鑑』卷二百四十八唐紀六十四宣宗大中二年の條に、「六月、禮院檢討官王皞貶句容令。初、憲宗之崩、上疑郭太后預其謀。又鄭太后本郭太后侍兒、有宿怨。故上卽位、待郭太后禮殊薄、郭太后意快快。一日、登勤政樓、欲自隕。上聞之大怒。是夕、崩、外人頗有異論。上以鄭太后故、不欲以郭后祔憲宗。有司請葬景陵外園、皞奏宜合葬景陵、神主配憲宗室。奏入、上大怒。白敏中召皞詰之。皞曰、太皇太后、汾陽王之孫、憲宗在東宮爲正妃、逮事順宗爲婦。憲宗厭代之夕、事出曖昧。太皇太后母天下、歷五朝、豈得以曖昧之事遽廢正嫡之禮乎。敏中怒甚、皞辭氣愈厲。諸相會食、周墀立於敏中之門以俟之。敏中使謝曰、方爲一書生所苦、公弟先行。墀入、至敏中廳問其事、見皞爭辨方急。墀舉手加額、歎皞孤直。明日、皞坐貶官」とある。○舊書は則ち……『舊唐書』卷五十二列傳二后妃下に、「憲宗懿安皇后郭氏、尚父子儀之孫、贈左僕射・駙馬都尉曖之女。母代宗長女升平公主。憲宗爲廣陵王時、納后爲妃。以母貴父・祖有大勳於王室、順宗深寵異之。貞元十一年、生穆宗皇帝。元和元年八月、冊爲貴妃。八年十二月、百僚拜表請立貴妃爲皇后、凡三上章。上以歲暮來年有子午之忌且止。帝後庭多私愛、以后門族華盛、慮正位之後、不容嬖幸、以是冊拜後時。元和十五年正月、穆宗嗣位。閏正月、冊爲皇太后」とあり、その後「敬宗卽位、尊爲太皇太后」とあり、また「文宗孝而謙謹。奉祖母有禮。膳羞珍果饜夷奇貢、獻郊廟之後、及三宮而後進御。武宗卽位、以后祖母之尊、門地素貴、奉之益隆。旣而宣宗繼統。卽后之諸子也。恩禮愈異於前朝。大中年、崩于興慶宮。諡曰、懿安皇太后、祔葬于景陵。后歷位七朝、五居太母之尊、人君行子孫之禮、福壽隆貴四十餘年。雖漢之馬・鄧、無以加焉。識者以爲汾陽社稷之功未泯、復鐘慶于懿安焉」とあり、趙翼が説くが如く「旣而宣宗繼統。卽后之諸子也。恩禮愈異於前朝。大中年、崩于

興慶宮。」としている。白敏中や王皞の遣り取りすら、まるで無かったかのように載せていない。○新書は其の……『新唐書』卷七十七列傳二后妃下に、「憲宗懿女皇后郭氏、汾陽王子儀之孫。父曖、尚昇平公主、實生后。憲宗爲廣陵王、媾以爲妃。順宗以其家有大功烈而母素貴、故禮之異諸婦。是生穆宗。元和元年、進冊貴妃。穆宗嗣位、上尊號皇太后、贈（后父）曖太尉、母齊國大長公主、擢兄釗刑部尚書、縱金吾大將軍。后移御興慶宮、凡朔望三朝、帝率百官詣宮門爲壽。或歲時慶問燕饗、後宮戚里內外婦、車騎駢壅、環佩之聲滿宮。帝亦蒙矜、朝夕供御、務華衍侈大稱后意。后嘗幸驪山、登覽裴回、詔景王督禁甲從。帝自到昭應奉迎、留帳飲數日還。帝崩、中人有爲后謀稱制者。后怒曰、吾效武氏邪。今太子雖幼、尚可選重德爲輔。吾何與外事哉。敬宗立、號太皇太后。寶曆倉卒、后召江王嗣皇帝位、是爲文宗。文宗性謹孝事后有禮。凡羞果鮮珍及四方奇奉、必先獻宗廟・三宮而後御之。武宗喜畋遊、角武抃擇五坊小兒得出入禁中。它日問后起居、從容請曰、如何可爲盛天子。后曰、諫巨章疏宜審覽。度可用用之、有不可以詢宰相。毋拒直言、勿納偏言。以忠良爲腹心、此盛天子也。帝再拜、還索諫章閱之、往往道遊獵事、自是畋幸稀。小兒武抃等不復橫賜矣」とあり、郭皇后の賢才なることと、各皇帝より重んぜられたことを記述するがその下文は、「宣宗立。於后諸子也。而母鄭、故侍兒、有曩怨。帝奉養禮稍薄。后郁郁不聊、與一二侍人登勤政樓、將自隕、左右共持之。帝聞不喜。是夕后暴崩。有司上尊諡、葬景陵外園。太常官王皞請后合葬景陵以主祔憲宗室。帝不悅。令宰相白敏中讓之。皞曰、后乃憲宗東宮元妃、事順宗爲婦、歷五朝母天下、不容有異論。敏中亦怒、周墀又責謂、皞終不撓。墀曰、臯信孤直。俄貶皞句容令。懿宗咸通中、皞還爲禮官、申抗前論。乃詔后主祔於廟」とあり、「帝奉養禮稍薄。后郁郁不聊、與一二侍人登勤政樓、將自隕、左右共持之。帝聞不喜。是夕后暴崩」と、郭皇后が突然崩じたことを記している。そして宣宗に冷遇されたことと、王皞の上疏・抗辨のことも載せている。○武后 諸宗室……『新唐書』卷七十九韓王元嘉傳に、「會武后詔宗室朝明堂、元嘉遣使告諸王曰、大享後、太后必盡誅諸王、不如先事起。不然、李氏無種矣」と有る。○良嗣 相たり……『新唐書』

卷一百三蘇良嗣傳に「遇薛懷義于朝、懷義偃蹇、良嗣怒、叱左右批其頰、曳去。武后聞之、戒曰、『弟出入北門、彼南衙宰相行來、毋犯之。』」とある。また、『資治通鑑』第二〇三卷唐紀十九に「蘇良嗣遇僧懷義於朝堂、懷義偃蹇不爲禮。良嗣大怒、命左右捽曳、批其頰數十。義訴於太后、太后曰、『阿師當於北門出入、南牙宰相所往來、勿犯也』」と有る。○其の母は……『新唐書』卷八十曹王明傳に「曹王明、母本巢王妃、帝寵之、欲立爲后、魏徵諫曰、陛下不可以辰嬴自累。乃止」と有る。○高宗重潤を……『新唐書』卷八十一列傳第六三宗諸子の中宗四子に、「懿德太子重潤、本名重照。避武后諱改焉。帝爲皇太子時生東宮、高宗喜甚、乳月滿爲大赦天下、改元永淳。是歲、立爲皇太孫、開府置官屬。帝問吏部侍郎裴敬彝・郎中王方慶對曰、禮有嫡子無嫡孫。漢・魏太子在、子但封王。晉立潁懷子爲皇太孫、齊立文惠子爲皇太孫、皆居東宮。今有太子。又立太孫於古無有。帝曰、自我作古若何。對曰、禮、君子抱孫不抱子。孫可以爲王父屍者、昭穆同也。陛下肇建皇孫、本文千億之慶。帝悅、詔議官屬」とある。○仁傑は……『新唐書』卷一百一十五狄仁傑傳に、「仁傑曰、『臣觀天人未厭唐德。比以問宰相、匈奴犯邊、陛下使梁王三思募勇士於市、蹶月不及千人。廬陵王代之、不浹日、輒五萬。今欲繼統、非廬陵王莫可』。后怒、罷議。久之、召謂曰、『朕數夢雙陸不勝、何也』。於是仁傑與王方慶俱在、二人同辭對曰、『雙陸不勝、無子也。天其意者以倣陛下乎。且太子、天下本、本一搖、天下危矣。文皇帝身蹈鋒鏑、勤勞而有天下、傳之子孫。先帝寢疾、詔陛下監國。陛下掩神器而取之、十有餘年、又欲以三思爲後。且姑姪與母子孰親。陛下立廬陵王、則千秋萬歲後常享宗廟。三思立、廟不耐姑』后感悟、即日遣徐彥伯迎廬陵王於房州。王至、后匿王帳中、召見仁傑語廬陵事。仁傑數請切至、涕下不能止。后乃使王出曰、『還爾太子』。仁傑降拜頓首曰、『太子歸、未有知者、人言紛紛、何所信』。后然之。更令太子舍龍門、具禮迎還、中外大悅。初、吉瑱、李昭德數請還太子、而后意不回、唯仁傑每以母子天性爲言、后雖伎忍、不能無感、故卒復唐嗣」と有る。○李德裕……『新唐書』卷一百一十六王綝傳に「贊曰、李德裕著書稱、『方慶爲相時、子爲眉州司士參軍。武后曰、君在相位、何子之遠。對曰、廬陵是陛下

愛子、今尚在遠、臣之子庸敢相近。以比倉唐悟文侯事。』嗟乎、君子哉。雖造次不忘悟君於善。及建言不斥太子名、以動羣臣、示中興之漸、所謂人難言者、於方慶難乎哉。德裕之稱、爲不誣矣』と有る。○敬暉桓彥範：—『新唐書』卷一百二十列傳第四十五 五王中の桓彥範傳に、「張柬之將誅易之等、引與定策。於是以彥範・敬暉爲左・右羽林將軍、屬以禁兵。時中宗每北門起居、因得謁陳祕計。神龍元年正月、彥範・暉率羽林兵與將軍李湛・李多祚・楊元琰・薛思行等千騎五百人討賊。令湛・多祚就東宮迎中宗至玄武門、彥範等斬關入、士皆鼓噪。時武后處迎仙宮之集仙殿、斬易之等廡下。后聞變而起、見中宗曰、乃汝耶。豎子誅、可還宮。彥範進曰、太子今不可以歸。往天皇棄群臣、以愛子托陛下。今久居東宮。群臣思天皇之德、不血刃清內難、此天意人事歸李氏。臣等謹奉天意、惟陛下傳位、萬世不絕天下之幸。后乃臥不復言。明日、中宗復位」とある。○十事を以て：—『新唐書』卷一百二十四姚崇傳に、「崇因跪奏、『臣願以十事聞陛下度不可行、臣敢辭。』帝曰、『試爲朕言之。』崇曰、『垂拱以來、以峻法繩下。臣願政先仁恕、可乎。朝廷覆師青海、未有牽復之悔。臣願不倖邊功、可乎。比來壬佞冒觸憲網、皆得以寵自解。臣願法行自近、可乎。后氏臨朝、喉舌之任出闈人之口。臣願官豎不與政、可乎。戚里貢獻以自媚于上、公卿方鎮寢亦爲之。臣願租賦外一絕之、可乎。外戚貴主更相用事、班序荒雜。臣請戚屬不任臺省、可乎。先朝褻狎大臣、虧君臣之嚴。臣願陛下接之以禮、可乎。燕欽融、韋月將以忠被罪、自是諍臣沮折。臣願租臣皆得批逆鱗、犯忌諱、可乎。武后造福先寺、上皇造金仙、玉真二觀、費鉅百萬。臣請絕道佛營造、可乎。漢以祿、莽、閻、梁亂天下、國家爲甚。臣願推此鑒戒爲萬代法、可乎。』帝曰、『朕能行之。』崇乃頓首謝」と有る。○郝靈佺：—『新唐書』卷一百二十四宋璟傳に「璟風度凝遠、人莫涯其量。始、自廣州入朝、帝遣內侍楊思勳驛送之、未嘗交一言。思勳自以將軍貴幸、訴之帝、帝益嗔重。璟爲宰相、務清政刑、使官人皆任職。聖曆後、突厥默啜負其疆、數窺邊、侵九姓拔曳固、負勝輕出、爲其狙擊斬之、入蕃使郝靈佺傳其首京師。靈佺自謂還必厚見賞。璟顧天子方少、恐後干寵蹈利者夸威武、爲國生事、故抑之、踰年、纔授右武郎衛將、靈佺悲憤不食死。張嘉貞後爲相、

聞堂案、見其危言切議、未嘗不失聲歎息。六子、昇・尙・渾・華・衡」と有る。○堂案―宰相の政務についての調べがき。中書省の案牘。○林甫に堂有：―『新唐書』卷二百二十三上列傳第一百四十八上姦臣上の李林甫傳に、「林甫有堂如偃月、號月堂。每欲排構大臣、卽居之、思所以中傷者。若臺而出卽其家碎矣。」とあり、その後文に、「林甫居相位凡十九年。固寵市權、蔽欺天子耳目。諫官皆持祿養資、無敢正言者。補闕杜璿再上書言政事、斥爲下邳令。因以語動其餘曰、明主在上、群臣將順不暇、亦何所論。君等獨不見立仗馬乎。終日無聲而飮三品芻豆一鳴、則黜之矣。後雖欲不鳴得乎。由是諫爭路絶」とある。○舊書は林甫：―『舊唐書』卷一百六李林甫傳に、「自無學術、僅能秉筆。有才名於時者尤忌之。而郭愼微・苑鹹文士之闡茸者、代爲題尺。林甫典選部時、選人嚴迴判語有用杖・杜二字者。林甫不識杖字。謂吏部侍郎韋陟曰、此云杖杜何也。陟俯首不敢言。太常少卿姜度、林甫舅子。度妻誕子、林甫手書慶之曰、聞有弄璋之慶。客視之掩口」とある。○其れ永王：―『新唐書』卷一百四十九劉晏傳に、「永王璘署晏右職、固辭。移書房琯、論封建與古異、今諸王出深宮、一旦望桓・文功、不可致。詔拜度支郎中、兼侍御史、領江淮租庸事。晏至・郡而璘反、乃與採訪使李希言謀拒之。希言假晏守餘杭、會戰不利、走依晏」と有る。○晏籍せら：―『新唐書』卷一百四十九劉晏傳に、「建中元年七月、詔中人賜晏死、年六十五。後十九日、賜死詔書乃下、且暴其罪。家屬徒嶺表、坐累者數十人、天下以爲冤。時炎兼刪定使、議籍沒、衆論不可、乃止。然已命簿錄其家、唯雜書兩乘、米麥數斛、人服其廉」と有る。○神功：―『新唐書』卷一百四十四田神功傳に「田神功、冀州南宮人。天寶末、爲縣史。會天下兵興、賊署爲平盧兵馬使、率歸朝、從李忠臣收滄・德、攻相州、拒杏園。後守陳留、戰不勝、與許叔冀降于史思明」と有る。○新書は郭晞：―『新唐書』卷一百五十三列傳第七十八段秀實傳に、「時郭子儀爲副元帥居蒲。子晞以檢校尙書領行營節度使、屯邠州。士放縱不法。邠人之嗜惡者、納賄竄名伍中、因肆志、吏不得問。白晝群行丐頡於市、有不嘽。輒擊傷市人、椎釜鬲甕盎盈道、至撞害孕婦。孝德不敢劾、秀實自州以狀白府、願計事。至則曰、天子以生人付公治。公見人被暴害、恬然且

大亂、若何。孝德曰、願奉教。因請曰、秀實不忍人無寇暴死、亂天子邊事。公誠以爲都虞候、能爲公已亂。孝德卽檄署付軍。俄而晞士十七人入市取酒、刺酒翁、壞釀器。秀實列卒取之、斷首置槩上、植市門外。一營大噪盡甲、孝德恐、召秀實曰、奈何。秀實曰、請辭於軍。乃解佩刀、選老鏑一人持馬、至晞門下。甲者出、秀實笑且入曰、殺一老卒、何甲也。吾戴頭來矣。甲爲愕眙。因曉之曰、尙書固負若屬邪。副元帥固負若屬邪。奈何欲以亂敗郭氏。晞出、秀實曰、副元帥功塞天地、當務始終。今尙書恣卒爲暴、使亂天子邊、欲誰歸罪。罪且及副元帥。今邠惡子弟以貨竄名軍籍中、殺害人藉藉如是。幾日不大亂。亂由尙書出。人皆曰、尙書以副元帥故不戢士。然則郭氏功名、其與存者有幾。晞再拜曰、公幸教、晞願奉軍以從。卽叱左右皆解甲。令曰、敢喧者死。秀實曰、吾未哺食、請設具。已食曰、吾疾作、願宿門下。遂臥軍中。晞大駭、戒候卒擊柝衛之。旦、與俱至孝德所謝不能。邠由是安。」とある。○大將焦令謔：『『新唐書』同上下文に、「初、秀實爲營田官。涇大將焦令謔取人田自占、給與農、約熟歸其半。是歲大旱、農告無入。令謔曰、我知入、不知早也。責之急。農無以償、往訴秀實。秀實署牒免之、因使人遜諭令謔。令謔怒召農責曰、我畏段秀實邪。以牒置背上、大杖擊二十、輿致廷中。秀實泣曰、乃我困汝。卽自裂裳裹瘡注藥、賣己馬以代償。淮西將尹少榮頗剛鯁。入罵令謔曰、汝誠人乎。涇州野如藉。人饑死而爾必得穀、擊無罪者。段公仁信大人。惟一馬、賣而市穀入汝。汝取之不恥。凡爲人傲天災、犯大人、擊無罪者、尚不愧奴隸邪。令謔聞、大愧流汗曰、吾終不可以見段公。一夕、自恨死。」とある。○柳宗元の記：『『柳河東集』卷八行狀の段太尉逸事狀に、「太尉始爲涇州刺史。時汾陽王以副元帥居蒲。王子晞爲尙書、領行營節度使、寓軍邠州。縱士卒無賴、邠人偷嗜暴惡者、率以貨竄、名軍伍中則肆志、吏不得問。日羣行丐取於市、不嗛。輒奮擊、折人手足、椎釜鬲甕盎、盈道上、袒臂徐去。至撞殺孕婦人、邠寧節度使白孝德、以王故戚不敢言。太尉自州以狀白府、願計事。至則曰、天子以生人付公理公。見人被暴害、因恬然且大亂、若何。孝德曰、願奉教。太尉曰、某爲涇州、甚適少事。今不忍人無寇暴死、以亂天子邊事。公誠以都虞候、命某者能爲公已亂、使公之人不得害。孝德曰、幸甚。」



如太尉請。既署。一月、晞軍士十七人入市取酒、又以刃刺酒翁、壞釀器。酒流溝中、太尉列卒取十七人、皆斷頭注槩上、植市門外。晞一營大譟。盡甲、孝德震恐召太尉曰、將奈何。太尉曰、無傷也。請辭於軍。孝德使數十人從太尉、太尉盡辭去。解佩刀、選老嫗者一人、持馬至晞門下。甲者出、太尉笑且入曰、殺一老卒、何甲也。吾戴吾頭來矣。甲者愕。因諭曰、尚書固負若屬耶。副元帥固負若屬耶。奈何欲以亂敗郭氏爲。白尚書出聽我言。晞出見太尉。太尉曰、副元帥勦塞天地、當務始終。今尚書恣卒爲暴。暴且亂、亂天子邊、欲誰歸罪。罪且及副元帥。今邠人惡子弟以貨竄名軍籍中、殺害人如是。不止幾日不大亂。大亂由尚書出。人皆曰、尚書倚副元帥不戢士。然則郭氏功名其與存者、幾何。言未畢、晞再拜曰、公幸教晞以道。恩甚大。願奉軍以從。顧叱左右曰、皆解甲散還火伍中。敢譁者死。太尉曰、吾未哺食。請假設草具。既食曰、吾疾作。願留宿門下。命持馬者去且日來、遂臥軍中。晞不解衣、戒侯卒擊柝衛太尉。旦、俱至孝德所、謝不能、請改過邠州。由是無禍。先是、太尉在涇州爲營田官。涇大將焦令謨取人田、自占數十頃、給與農曰、且熟歸我半。是歲、大旱、野無草。農以告謨。謨曰、我知入數而已。不知旱也。督責益急、且飢死、無以償。卽告太尉。太尉判狀辭甚異、使人求諫。謨盛怒、召農者曰、我畏段某耶。何敢言我取判鋪背上。以大杖擊二十、垂死。輿來庭中、太尉大泣曰、乃我困汝。卽自取水洗去血裂裳衣瘡、手注善藥。旦夕、自哺農者然後食。取騎馬賣市穀代償、使勿知。淮西軍帥尹少榮、剛直士也。入見謨、大罵曰、汝誠人耶。涇州野如赭、人且飢死而必得穀、又用大杖擊無罪者。段公仁信大人也。而汝不知敬。今段公惟一馬賤賣市穀入汝。汝又取不恥。凡爲人犯天災、傲大人擊無罪者又取仁者穀、使主人出無馬。汝將何以視天地、尙不愧奴隸耶。謨雖暴抗、然聞言則大愧流汗、不能食曰、吾終不可以見段公。一夕、自恨死」とある。

○杞私憾を……『新唐書』卷二百二十三盧杞傳に、「李希烈反、杞素惡顏眞卿挺正敢言、卽令宣慰其軍、卒爲賊害」と有る。○播の遷を……『新唐書』卷二百二十三盧杞傳に、「以播遷事指杞、杞卽誣寧反、帝殺之」と有る。○關播の……『新唐書』卷一百五十一に、「播從幸奉天。盧杞、白志貞已貶而播猶執政、議者不平、遂罷爲刑部尚書。韋倫等曰、

『宰相不善謀、使天子播越、尚可尚書邪』。相與泣諸朝。未幾、知刪定使」と有る。○中丞王守澄……『新唐書』卷百七十九鄭注傳に「先是、守澄死、以十一月葬滌水、注奏言、『守澄、國勢舊、願身護喪。』因羣宦者臨送、欲以鎮兵悉禽誅之。訓畏注專其功、乃先五日舉事。注率五百騎至扶風、令韓遠知其謀、奔武功。注聞訓敗、乃還。其屬魏弘節勸注殺監軍張仲清及大將賈克中等十餘人、注驚擾不暇聽。仲清與前少尹陸暢用其將李叔和策、訪注計事、斬其首、兵皆潰去。注妻兄魏逢尤佻險、贊注爲姦、數顧眊、爲率更令、鳳翔少尹。遣逢至京師與訓約、被誅。可復等及親卒千餘人皆族矣。擢仲清內常侍、遠咸陽令、叔和檢校太子賓客、賜錢千萬、暢鳳翔行軍司馬」と有る。○昭宗命……『新唐書』卷八十二列傳第七十一宗諸子の宣宗十一子に、「通王滋、會昌六年始王夔、與慶王沂同封。帝初詔鄆王居十六宅、餘五王處大明宮內院、以諫議大夫鄭漳・兵部郎中李鄴爲侍讀。五日一謁乾符門、爲王授經。鄆王立爲懿宗、乃罷。滋徙王。昭宗乾寧三年、領侍衛諸軍。是時、誅王行瑜而李茂貞怨、以兵入覲。詔滋與諸王分統安聖・奉宸・保寧・安化軍衛京師。天子將狩太原、韓建道迎之、留次華州。建畏王等有兵、遣人上急變、告諸王欲殺建、脅帝幸河中。帝驚、召建論之、稱疾不肯入。敕滋與睦王・濟王・韶王・彭王・韓王・沂王・陳王謁建自解、建留軍中奏言、中外異體、臣不可以私見。又言、晉八王擅權、卒敗天下。請歸十六宅、悉罷所領兵。帝不許。建以兵環行在、請誅大將李筠。帝懼、斬筠以謝。建盡逐衛兵、自是天子孤弱矣」とある。○新書は此に……『新唐書』同上に、「初、帝使嗣廷王戒丕・嗣丹王允往見李克用、二王還、建惡之。又嗣覃王嘗督軍伐茂貞。於是劾奏、比歲兵纏近輔、諸王階其禍、使乘輿越在下藩、不得安。臣已請解其兵。今延・覃・丹三王尚陰計以危國。請誅之。帝曰、渠至是邪。後三日、與劉季述矯詔以兵攻十六宅。諸王被發乘垣走、或升屋極號曰、帝救我。建乃將十一王竝其屬至石堤谷殺之、徐以謀反聞。天下冤之」とある。○宰相蕭遘……『新唐書』卷二百二十四朱攻傳に、「宰相蕭遘密召攻迎帝、攻趨鳳翔、令攻劫乘輿走陳倉、遂至興元。攻追不及、劫嗣襄王煊、奉爲帝。攻自號大丞相、專決萬機」とある。○仇士良傳に……『新唐書』卷二百七仇士良傳に「澤潞劉從諫本與訓約誅鄭

注。及訓死、憤士良得志、乃上書言、王涯等八人皆宿儒大臣、願保富貴、何苦而反。今大戮所加已不可追、而名曰逆賊、含憤九泉。不然、天下義夫節士、畏禍伏身、誰肯與陛下共治邪。即以訓所移書遣部將陳季卿以聞。季卿至、會石遇盜、京師擾、疑不敢進。從諫大怒、殺季卿、騰書于朝。又言、臣與訓誅注、以注本宦豎所提挈、不使聞知。今四方共傳宰相欲除內官、而兩軍中尉聞、自救死、妄相殺戮、謂爲叛逆。有如大臣挾無將之謀、自宜執付有司、安有縱俘劫、橫尸闕下哉。陛下視不及、聽未聞也。且宦人根黨蔓延在內、臣欲面陳、恐橫遭戮害、謹脩封疆、繕甲兵、爲陛下腹心。如姦臣難制、誓以死清君側。書聞、人人傳觀。士良沮恐、即進從諫檢校司徒、欲弭其言。從諫知可動、復言、臣所陳擊國大體、可聽、則宜洗有涯等罪。不可聽、則賞不宜妄出。安有死冤不申、而生者荷祿。固辭。累上書、暴指士良等罪。帝雖不能去、然倚其言差自彊。自是鬱鬱不樂、兩軍毬獵宴會絕矣」と有り、また「士良之老、中人舉送還第、謝曰、諸君善事天子、能聽老夫語乎。衆唯唯。士良曰、天子不可令閑暇、暇必觀書、見儒臣、則又納諫、智深慮遠、減玩好、省游幸、吾屬恩且薄而權輕矣。爲諸君計、莫若殖財貨、盛鷹馬、日以毬獵聲色蠱其心、極侈靡、使悅不知息、則必斥經術、闡外事、萬機在我、恩澤權力欲焉往哉。衆再拜」と有り、また「始、士良・弘志憤文宗與李訓謀、屢欲廢帝。崔慎由爲翰林學士、直夜未半、有中使召入、至祕殿、見士良等坐堂上、帷帳周密、謂慎由曰、上不豫已久、自即位、政令多荒闕、皇太后有制更立嗣君、學士當作詔。慎由驚曰、上高明之德在天下、安可輕議。慎由親族中表千人、兄弟羣從且三百、何可與覆族事。雖死不承命。士良等默然、久乃啓後戶、引至小殿、帝在焉。士良等歷階數帝過失、帝俛首。既而士良指帝曰、不爲學士、不得更坐此。乃送慎由出、戒曰、毋泄、禍及爾宗。慎由記其事、藏箱枕間、時人莫知。將沒、以授其子胤、故胤惡中官、終討除之、蓋禍原於士良・弘志云」と有る。○拾遺侯昌蒙……『新唐書』卷二百零八列傳第一百三十三宦者下「令孜知帝不足憚、則販鬻官爵、除拜不待旨、假賜緋紫不以聞。百度崩弛、內外垢玩。既所在盜起、上下相掩匿、帝不及知。是時賢人無在者、惟佞鄙沓貪相與備員、偷安嚙默而已。左拾遺侯昌蒙不勝憤、指言豎尹用權亂天下。疏入、賜

死内侍省」とある。○黄巢の亂令……『新唐書』同上下文に、「初、成都募陳許兵三千服黃帽、名黃頭軍、以捍蠻。帝至、大將將士、扈從者已賜。而不及黃頭軍、皆竊怨令孜。令孜置酒會諸將、以黃金樽行酒、即賜之。黃頭將郭琪不肯飲、曰、軍容能易偏惠均衆士、誠大願也。令孜目曰、君有功邪。答曰、戰黨項、薄契丹、數十戰、此琪之功。令孜嘻。怒曰、知之。密以冗註酒中。琪飲已、馳歸、殺一婢、吮血得解。因夜燒營、剽城邑。敬瑄討敗之、奔廣都、遂走高駝所。帝聞變、與令孜保東城自守、群臣不得見。左拾遺孟昭圖請對、不召。因上疏極陳、君與臣一體相成、安則同寧、危則共難。昔日西幸、不告南司。故宰相・禦史中丞・京兆尹悉碎於賊、唯兩軍中尉以扈乘輿得全。今百官之在者、率冒重險出百死者也。昨昔黃頭亂、火照前殿、陛下惟與令孜閉城自守、不召宰相、不謀群臣。欲入不得、求對不許。且天下者、高祖・太宗之天下、非北司之天下。陛下固九州天子、非北司之天子。北司豈悉忠於南司。廷臣豈無用於敕使。文宗時、宮中災、左右巡使不到、皆被顯責。安有天子播越、而宰相無所豫、群司百官棄若路人。已事誠不足諫、而來者冀可追也。疏入、令孜置不奏。矯詔貶昭圖嘉州司戶參軍、使人沈於蟆頤津」とある。○楊復光の黨……また『新唐書』同上に、「中人曹知愨者、富家子、頗沈鷲。賊在長安、知愨以清・濁二谷之人倚山爲屯、不屈賊。陰教士卒變衣服、言語與賊類者、夜入長安攻賊營、賊大懼。帝聞、賜金紫、擢內常侍。聞帝將還、因大言、我且擁衆大散關下、閱群臣可歸者納之。令孜謂然、密令王行瑜以邠州兵度嵯峨山、襲殺其衆。由是益自肆。禁制天子不得有所主斷。帝以其專、語左右輒流涕」とある。○令孜又た新……さらに『新唐書』同上に、「別募神策新軍、以千人爲都、凡五十四都、分左右爲十軍統之」とある。○樊戩を誣……『新唐書』卷二百九來俊臣傳に、「俊臣誣司刑史樊戩、以謀反誅、其子訴闕下、有司無敢治、因自刎腹」と有る。○龍門に集まり……『新唐書』卷二百九來俊臣傳に、「萬歲通天中、上巳、與其黨集龍門、題指紳名於石、抵而仆者先告、抵李昭德不能中」と有る。○自ら石勒と比べ……『新唐書』卷二百九來俊臣傳に、「俊臣知羣臣不敢斥己、乃有異圖、常自比石勒、欲告皇嗣及廬陵王與南北衙謀反、因得驕志」と有る。○天官選者……『新唐書』卷二百九來

俊臣傳に、「方俊臣用事、託天官得選者二百餘員、及敗、有司自首、后責之、對曰、「臣亂陛下法、身受戮。忤俊臣、覆臣家。后赦其罪」と有る。○顏杲卿……『新唐書』卷百九十二顏杲卿傳に「泉明有孝節、喜振人之急。既爲承業所遣、未至而常山陷、故客壽陽。史思明圍李光弼、獲泉明、裹以革、送幽州、聞關得免。思明歸國、而眞卿方爲蒲州刺史、令泉明到河北求宗屬。始、一女及姑女竝流離賊中、及是并得之、悉錢三萬贖姑女還、取貨復往、則已女復失之。履謙及父故將妻子奴隸尙三百餘人、轉徙不自存、泉明悉力贍給、分多勻薄、相扶挾度河託眞卿。眞卿隨所歸資送之。泉明之殯父、與履謙分柩、護還長安。履謙妻疑歛具儉狹、發視之、與杲卿等、乃號踊、待泉明如父。肅宗拜泉明郛令、政化清明、誅宿盜、人情翕然。成都尹舉其課第一、遷彭州司馬。家貧、居官廉、而孤藐相從百口、飢鬻不給、無愠歎」と有る。

【現代語譯】

楊貴妃傳について、『舊唐書』は、楊貴妃が（玄宗の妃になる）前に壽王の妃であった事を記載しておらず、ただ「武惠妃がなくなられて、後宮に（玄宗の）おきにいりの妃はいなくなつた。ある人が楊元琰の娘は美しいと告げた。玄宗はそこで（彼女を）呼びよせた。妃は道士の服を身にまとい、太眞と名乗つた。（そのため）玄宗はとてもよろこんだ。二云」と記すだけである。『新唐書』はこの部分に對し、「皇帝は妃が自らの意志で女道士になることを請うように命じた。妃は太眞と名乗り、息子の壽王には、韋昭訓の娘を娶らせた」という文を加筆している。「『舊唐書』は國史の舊文と考えられる。だから皇室の都合の悪いことは隠し記さないのであらう。」

憲宗の郭皇后について。穆宗・敬宗・文宗・武宗朝とを歴る累代の皇太后であった。宣宗が即位する時、宣宗の母鄭氏が元々郭皇太后の侍婢であつたことから宿怨をもつていた。それ故宣宗が郭皇太后を奉るときの禮はやや冷たいものであつた。郭皇太后は鬱鬱として安堵できず、樓臺に登り自ら飛び降りようとし、左右の者が皇太后を抑えたので（飛び

降りることを)免れた。宣宗はこれを聞いて喜ばなかった。この夜、郭皇太后は突然崩御した。これは郭皇太后がその死を善く迎えることができなかった記述である。『資治通鑑』はこれをとても詳しく記載しているが、『舊唐書』は、「宣宗が即位すると(郭皇太后に對する)恩禮は益々厚くなり、大中年間に興慶宮で崩御した」といつている。これは實のことを全く取り上げていない。『新唐書』は(郭皇太后が)突然崩御したことを詳しく載せており、『舊唐書』と較べてみると實のことを得ているとなせる。また郭皇太后が崩御した後、太常の王暉が憲宗の陵に合葬しましょう、と請うたが、宣宗は喜ばず、宰相であった白敏中に王暉を責め立てさせた。王暉は言った、「郭皇太后は憲宗皇帝が東宮に居られた時の元妃であられ、順宗皇帝の御子の婦であり、歴代五朝において天下に母たる存在であったことに、異論を夾む餘地などござらん」と。その事は遂に(合葬することに)定まった。これはまた、當時の一大事である。けれども『舊唐書』はまたも記載していない。

韓王元嘉傳について、『新唐書』は「武后は諸宗室に詔を發して、明堂に參朝させた。元嘉は使者を送って諸王に『大宴會の後、武后は全て諸王を殺そうとするだろう。殺される前に決起した方が良い』と傳えた。そこで、瑯琊王沖はすぐに出兵した」を増している。この事件もまた、武后朝の一大事である。『舊唐書』には載せていない。

蘇良嗣傳について、良嗣が宰相であった時、薛懷義に宮中で遇った。(薛懷義は)甚だおごりたかぶっていた。良嗣は怒って、(良嗣の)左右の者達を叱ってその(薛懷義の)頬をうたせ、引きずり出させた。武后はこれを聞いて、懷義を戒めて曰った、「あなた達は北門から出入りしなさい。あの南衙宰相の行來するのを犯してはならない」と。これもまた、武后が甚だしく淫らであるけれども、なおきちんとした人物を任用することが出来たことを示している。『舊唐書』は載せていないが、『新唐書』には載せている。

曹王明傳は、彼の母はもともと巢刺王李元吉の妃であったが、太宗が皇后に立ようとした。魏徵が諫言したのでやめた。

このことは太宗が國を建てたはじめに、後宮での行いにおいて落ち度があったことを示すものである。この事件の後、唐王朝がしばしば色戀沙汰によって國が傾いたことは、必ずしもこの事件に由来しないとばかりらないのである。このことは『舊唐書』は記載していない。『新唐書』はこのことを補っている。

懿德太子重潤傳について。高宗は重潤を立て皇太孫とした。裴敬彝と王方慶は、「晉は潛懷太子の子を立てて皇太孫とし、南齊は文惠太子の子を立てて皇太孫とし、(兩皇太孫は)皆な東宮に居らせた。(しかし)今既に皇太子がいるのに、また皇太孫を立てるといふのは古に例が無い」とした。この議論は後世の倣いとするのに足るものである。『舊唐書』は記載せず、『新唐書』はこのことを補っている。

狄仁傑傳に「武后は武三思を皇太子にしようとした。仁傑は『人々の感情は、まだ唐から離れていない。匈奴が國境を侵害してきた時に、三思に兵を募らせたが、翌月になっても應じる者がいなかった。そこで廬陵王と交代したところ、十日も経たないうちに五萬人集まった』と強く言った。武后は怒って、この朝議を中止した。後に、(仁傑は)王方慶と(武后に)雙六について論じた際に、『姑と姪の關係は、母子關係の近さに及ばない』と改めて強く言った。このことによつて、武后にこれを理解させ、かくて廬陵王を呼び戻した」と。これは、仁傑が唐の忠臣であったことを示している。『舊唐書』は載せていない。『新唐書』はこのことを補っている。

王綝傳について、李德裕は、「王方慶「王綝」が宰相であった時、自分の子を眉州刺史に任じた。(そのため)武后は『あなたは宰相の位にいるのに、どうして我が子を遠ざけるのですか』と尋ねた。(王綝は)それに對して『廬陵王は陛下のお子でありますのに、現在も依然として陛下の遠くにいらっしやいます。家臣の子がどうして近くにおくことなぞできましようか』と言つて、武后に(廬陵王のことを)感じ悟らせようとした」という事跡をたたえている。この事跡も王綝が唐王朝の忠臣であることを示している。これを『舊唐書』は記載していない。『新唐書』は補っている。

桓彦範傳について。敬暉・桓彦範等が張易之を斬った後、武后は太子を東宮に還らせようとした。桓彦範は言った、「太子は再び（東宮に）還すべきではありません。陛下におかれましては、ぜひにも帝位を（太子に）傳えてもらわなければなりません」と。武后は臥せて二度と言いださなかった。中宗はこれによって復位した。これは廬陵王が復位した時の一大事である。『舊唐書』は記載せず、『新唐書』はこのことを補っている。

姚崇傳について、玄宗は、崇を宰相にしようと思った。崇は、まず十の事柄を擧げて意見を求めた。これこそ、宰相における功績の始まりである。この後の功勳は全て、このことから立てられたものである。『舊唐書』は、全然載せていない。『新唐書』は、このことを補っている。

宋璟傳は、『新唐書』が「郝靈佺は使節として突厥に行っており、そこで默啜の首を得て、その首を朝廷に獻上した。宋璟は天子が邊境での功績を好むようになることを恐れ、功績を抑えて、取り立てなかった」という記事を増している。これは宋璟が大局を見据えていたことを示すものである。『舊唐書』は載せていない。『新唐書』がこれを記載しているのは、たしかな意圖があることである。また「宋璟の後に張嘉貞が宰相になったとき、堂案を調べ、宋璟の我が身を顧みない直言の様子を見て、いままで聲を失い感歎しなかったことはない」を増している。この事柄は宋璟の平素のことを端的に示すものである。

李林甫傳について。李林甫には堂が有り、その堂の形は半月のようであった。讒言して誰かを陥れようと思ったら、即座に（その堂に）入り中傷できそうな理由を思念した。もしも喜色満面で出てきたならば、その（中傷対象者の）家は破滅させられた。また、諫言を爲す者に諭して、「儀仗として列立する馬は終日聲をあげることはない。三品料に飽きて一度でも嘶けば即座に斥けられる」と言った。これにより諫言を上疏するものが絶えた。これらは全て老獪な奸臣が悪行をなした形跡である。『舊唐書』は記載しておらず、『新唐書』はこのことを増補している。考えてみるに、『舊唐



書』は李林甫には文學的素養が無く、かつて「杖杜」を「杖杜」と読み、「弄璋」を「弄璋」と書いたとして、これらのような些細な事は既に（李林甫傳中に）詳しく記してある。しかし「偃月堂」や「立仗馬」などの事は反って記載していないのはどうしてであろうか。『新唐書』は「杖杜」「弄璋」のことは反って削っている。それは（『新唐書』の）重要視する所がそこではなかったからである。肝要を得ているといえよう。

劉晏傳について、『新唐書』は「劉晏は、永王璘が任用するのを斷った。永王璘が謀反を起こした時、劉晏は餘杭を守っていて、全力で永王璘の軍を拒いだ。劉晏の財産が調査を受けた後になってみると、ただ雜書が車二臺分と、米と麥が數斛にすぎなかった」を増している。この文は、劉晏の品行に關することである。『舊唐書』は載せていない。

田神功傳の「神功は初め安祿山から反亂軍の官職を受けたが、後に軍勢を引きつれ唐王朝に歸順した。また戦いに敗れて史思明に投降した。自分から身を脱して歸順した」という事跡は、『舊唐書』が全く記載していないので、かえっていままで賊軍に身を落としたことがないようである。『新唐書』はこのことを補筆している。

段秀實傳について。『新唐書』は郭晞麾下の軍士が好き勝手に横暴な行いをしたので、段秀實は（その軍士）十七人を斬ってすてたこと、および大將の焦令諶が農民の租税について責め立てたので、段秀實が馬を賣り代償とし、焦令諶はそれを恥じて死んだことを増補している。この二事はみな『舊唐書』には記載されていないものである。思うに、これらは柳宗元が記した「段太尉逸事狀」から取ったものであろう。それらを逸事というのであれば、必然的に國史に基づかないものはずである。柳宗元は恐らくかつて國史の本傳を見て、それにより別に狀を作つてこのことを著したのであろう。それを踏まえて推測してみれば、『舊唐書』は國史の原本をそのまま寫し、『新唐書』は他書を參考にして修成したことがわかるのである。また宋（祁）子京の功績を記すことへの深慮が見て取れる。

盧杞傳に「盧杞は個人的な怨みで顔眞卿を陥れるために、李希烈のもとに派遣した。（顔眞卿は）殺させた」と。又、

「崔甯が關播の人事の事で盧杞を非難した。盧杞はすぐに崔甯が謀反を起すと、(帝に)偽りを言った。帝は崔甯を殺した」と。これらの出来事は、まさに盧杞の奸惡を示している。『舊唐書』は載せていない。『新唐書』はこのことを補っている。

鄭注傳に「中丞王守澄が亡くなり、十一月に葬った。鄭注が『どうか葬儀を守護させて欲しい』と奏上し、實際には宦官達が葬送にくるのを待ちぶせし、鎮兵によって宦官をすべて捕らえて誅殺しようとした。李訓は鄭注が宦官一掃の功績を獨り占めにするのを恐れた。そこで五日前に事を起こし、とうとう甘露の變が起った」とある。此等のことは一大事であるに、『舊唐書』は記載していない。『新唐書』はこの事跡を補筆している。

夔王李滋傳について。昭宗は夔王李滋に命じて近衛の諸軍を率いさせた。昭宗は太原に行幸しようとし、韓建が華州で迎え入れたが、諸王が兵を率いているのを嫌い、關係のないことで讒言し、遂に(諸王の)兵權を取り上げ十六宅に歸らせた。(その後)偽の詔を出し兵で包圍して諸王を殺した。(殺された諸王は)およそ十一王であった。これらは何たることか。『舊唐書』はついで記載しておらず、『新唐書』はここ(夔王李滋傳)に記している。

朱玫傳について、宰相蕭遘は、密かに朱玫を呼び寄せて、帝を迎えに行かせた。朱玫は鳳翔に直ちに向かったが、田令孜は帝を劫して逃亡させた。朱玫は追跡したが追いつく事が出来ず、かえって襄王煚を皇帝に擁立した。これは、なんという事か。『舊唐書』は、その詳しい事を書きあらわしていない。『新唐書』は、このことを補っている。

仇士良傳に「甘露の變の後に、仇士良の勝手な振る舞いがますますひどくなった。劉從諫は、李訓による宦官を移動させ誅殺する計畫書を朝廷に奉り、王涯等に罪名を問い、宦官たちの死によって君側を清めようとし、仇士良たちの罪惡を次々にあげつらった。文宗は彼の言葉を受け、少し自分を勵ました。仇士良は、文宗が李訓や鄭注と一緒に宦官一掃を畫策したことに憤慨し、夜半に、直學士である崔愼由に命令して皇帝廢立の詔を草案させ、帝所まで招き入れ

て、目の前で文宗の過失を糾弾した。文宗はただうつむくだけであった。崔愼由は、自分の死によって正そうとしたが、仇士良は『學士でなかったならば、もうここに座することはできない』といい、また崔愼由を送る際に出でて『このことは決して漏らしてはいけない。よくない事が汝の一族におとずれるぞ』と脅した。愼由はこの事を記して、密かに箱の中にしまっておいた。死の間際になり息子の縉郎にこれを授けた。そのため縉郎は朱全忠と宦官を皆殺しにすることができたのである。また、仇士良が退官を願ひ屋敷に戻ろうとした際に、宦官や女官たちが彼を見送った。仇士良は彼等へ戒として『天子につかえる際に、天子が暇な折に經書や史書を讀ませたり、儒臣に會わせてはならない。ただ音楽や女色、犬や馬など玩物によって御心を惑わしておきさえすればよいのだ』という言葉を残した』とある。ここでのいくつかの事跡はすべて當時の媚びへつらいによる禍であるので、後世に垂れて戒とすべきものであるのに、『舊唐書』は記載していない。『新唐書』はこのことを増補している。

田令孜傳について。田令孜は權力を擅まにして、その行いは無法であった。拾遺であった侯昌蒙がそれを諷刺したが反つて死を賜った。黄巢の亂になると、田令孜は皇帝(僖宗)を誘導して蜀の地に行幸させたが、その勞いの賞與が黄頭軍にまで及ばなかった。黄頭軍は謀叛を起こそうとし、皇帝は田令孜と車城を砦として守備することになった。拾遺の孟昭圖は、「宰相や群臣と共に安危を謀るべきです」と上疏した。田令孜は偽の詔を出して孟昭圖を貶め、人を使つて彼を長江に沈めさせた。楊復光の徒黨であった曹知愨が、兵を長安に潛入させ賊の軍營を攻めさせた。(その後)皇帝は長安に歸還しようとし、曹知愨は大散關に麾下の兵を擁し、群臣の中でも長安に歸してよい(害のない)人物を檢閲し、それになつた者たちを(大散關より)中に入れようとした。田令孜はこのことを憎々しく思い、祕密裏に王行瑜に命じて軍を出させ、曹知愨の軍衆を襲撃して殺させた。田令孜はまた、新たな軍をつくらうと兵を募り、千人を一部(一隊)として計五十四都つくり、それを左右にそれぞれ振り分け十軍とし、その軍を統べた。これらは全て田令孜の罪で

ある。『舊唐書』は記載せず、『新唐書』はこのことを補足している。

來俊臣傳について、來俊臣の子は樊戩を罪に陥れるのに、謀反の噂を流したので誅殺された。樊戩の子は天子に訴えようとしたが、上奏してもらえずに、それが原因で自ら腹を刳いて死んだ。上巳の日、來俊臣はその一派と龍門に集まり、搢紳の名を石に記し、石を投げて仆れた石に記されている名を先ず告げ、李昭徳の名を記した石には當らなかつた。李昭徳はこれを知って、そこで、衛遂忠にその悪事を發かせた。「自ら石勒と比較して、皇嗣と廬陵王が南北の衛兵と謀反することを告げようとしている」と言わせた。來俊臣は事を用いる時に、天官に託して選じた者二百餘員。敗北したので、有司は自首し、武后はこれを詰って、「陛下の法を亂せば死刑を受け、來俊臣に忤えば、臣の族は滅ぼされる」と答えた。これは皆、俊臣の惡を示している。『舊唐書』は載せていない。『新唐書』は補っている。

顏泉明傳に「顏泉卿の子の泉明は、先づ顏泉卿が賊を討伐したが、敗れたことにより、顏泉明は壽陽に身を寄せた。史思明が顏泉明を捕らえ、手枷足枷をはめて幽州に護送した。しかし道が險しく顏泉明は逃れることができた。その後、邨の令となり、また彭州司馬になったが、いづれも善政を行った。その時に孤兒百人が顏泉明のもとで一緒に身を寄せたのに、粥を與えることができなかった。しかし恨むものはいなかつた」とある。これこそが忠臣の家を引き繼ぎ後世へと伝えていく者の姿である。しかし、『舊唐書』は記載していない。『新唐書』はこの事跡を補筆している。

(大兼健寛・新名主考美・關 清孝)

## 【原文】

2 舊唐書所載亦有不應刪而新書反削之者今亦錄於後

和思趙皇后傳舊書載其死後莫知瘞所將招魂葬之附於中宗陵彭景直上言招魂非古法宜據漢書郊祀志葬黃帝衣冠於橋山故事

以皇后禱衣耐葬按此可備變禮之用宜存新書不載

順宗王皇后傳舊書載后崩後公卿進諡議欲告天地宗廟禮院奏曰曾子問賤不誅貴幼不誅長故古者天子稱天以誅之皇后之諡則讀於廟江都集禮引白虎通曰皇后何所諡之以爲於廟又曰皇后無外事無爲於郊故天子諡成於郊皇后諡成於廟詔從之又初稱諡曰莊憲王太后禮儀使鄭綱引開元中昭成皇太后諡號之議請入廟稱后義繫於夫在朝稱太義繫於子今百司移牒恐不合除太字至神主人廟始當去之此亦議禮故事新書不載

封常清傳舊書載其臨刑時遺表全文蓋以明其心跡且著其枉也新書節之不過一二語雖覺簡淨殊少意味

李嗣業傳香積寺之戰嗣業以長刀陷陣固爲戰功第一及收長安後進取東都新店之戰王師又敗郭子儀已爲賊兵所包賴嗣業與回紇夾擊賊始遁去此亦嗣業大功也舊書詳之新書乃不錄

渾瑊傳舊書載瑊爲會盟使與土番盟梨樹園爲土番所劫之事甚詳新書但云爲結贊所劫副使以下皆陷惟瑊得免按梨樹園劫盟乃當時一大事瑊爲會盟使則此事不詳於瑊傳而詳於何處耶新書蓋恐形瑊之失策故略其詞耳

李吉甫傳舊書吉甫監修國史上問時政記何事對曰是宰相記天子事以授史官之實錄也古者左史記言即今起居舍人右史記事即今起居郎永徽中宰相姚璩慮造膝之言或不下聞請隨奏對而記於仗下以授史官今時政記是也此於朝制有關係新書刪之

張濬傳濬建議討李克用舊書全載克用訴表正見濬之孟浪生事及克用之負氣不恭新書盡刪之豈爲濬諱耶抑爲克用諱耶

王處存傳舊書黃巢據京師處存選驍卒五千以白繻爲號夜入京賊已遁軍人皆釋兵爭據第宅坊市少年多帶白號劫掠偵知之自灞上復襲京師市人以爲王師歡呼迎之處存爲賊所迫收軍還營賊怒召集兩市丁壯七八萬殺之血流成渠此亦一大事新書不載

### 【書目下二】

舊唐書の載する所も亦應に刪るべからざるもの有れども而れども新書反つて之を削る者は今亦後に録す

和思趙皇后傳。舊書其の死後瘞む所を知る莫く、將に招魂し之を葬し中宗陵に附せんとす。彭景直、「招魂は古法に非ず。宜しく漢書郊祀志の黃帝の衣冠を橋山に葬るの故事に據り、皇后の禱衣を以て耐葬すべし」と上言するを載す。按ずるに此れ變禮の用を備へ宜しく存すべきも、新書は載せず。

順宗王皇后傳、舊書は、「后崩するの後、公卿諡議を進めて、天地宗廟に告げんと欲す。禮院奏して曰く、「曾子問に、『賤は貴を誅せず、幼は長を誅せず』と。故に古者、天子には天を稱して以て之を誅し、皇后の諡は、則ち廟に讀む。江都集禮白虎通を引きて曰く、『皇后には何れの所にか之に諡す。以て廟に爲す』と。又曰く、『皇后外事無し。郊に爲すこと無し』と。故に天子の諡郊に成し、皇后の諡廟に成す」と。詔して之に従ふ。又初め諡を稱するに莊憲王太后と曰ふ。禮儀使鄭綱開元中の昭成皇太后の諡號の議を引きて謂ふ、『廟に入りて后と稱すは、義夫に繫くればなり。朝に在りて太と稱すは、義子に繫くればなり』今百司牒を移すも、恐らく合に『太』字を除くべからず。神主廟に入るに至り、始めて當に之を去るべしと」を載す。此れも亦た禮を議すの故事なるも、新書は載せず。

封常清傳、舊書其の刑に臨む時の遺表の全文を載するは、蓋し以て其の心跡を明かにし、且つ其の枉を著せばなり。新書の之を節すは一二語に過ぎず。簡淨を覺ゆと雖も、殊に意味少し。

李嗣業傳。香積寺の戰、嗣業長刀を以て陣を陷すは、固より戰功第一爲り。長安を收めて後、進み東都を取るに及び、新店の戰、王師又た敗れ、郭子儀已に賊兵の包む所と爲るも、嗣業と回紇夾擊するに賴り、賊始めて遁去す。此れも亦た嗣業の大功なり。舊書は之を詳かにし、新書は乃るに録さず。

渾瑊傳、舊書は「瑊會盟使と爲り土番と梨樹園に盟す。土番の劫かす所と爲るの事」を載するは甚だ詳し。新書は但だ、「結贊の劫かす所と爲り、副使以下皆陥れども、惟だ瑊のみ免るるを得」と云ふのみ。按ずるに梨樹園の盟を劫かざるは、乃ち當時の一大事なり。瑊會盟使爲れば、則ち此の事瑊傳に詳しからずして、何れの處に詳しきか。新書は蓋

し、其の失策を形はすを恐る。故に其の詞を略すのみ。

李吉甫傳、舊書に「吉甫國史を監修す。上時政記は何事を記すかと問ふ。對へて『是れ宰相天子の事を記し、以て史官に授くるの實録なり。古者、左史言を記すとは、即ち今の起居舍人なり。右史事を記すとは、即ち今の起居郎なり。永徽中、宰相姚璩造膝の言を慮り、或ひは間を下さざれば、奏對に隨ひて仗下に記し、以て史官に授くるを請ふ。今の時政記是れなり』と曰ふ」と。此れ朝制に於て關係有るも、新書之を刪る。

張濬傳、濬建議し李克用を討たんとす。舊書は克用の訴表を全載し、正に濬の孟浪なる生事、及び克用の氣を負ひ恭せざるを見す。新書盡く之を刪る。豈に濬の爲諱むや、抑も克用の爲諱むや。

王處存傳、舊書に「黃巢京師に據る。處存驍卒五千を選び、白繻を以て號と爲し、夜京に入るも、賊已に遁る。軍人皆兵を釋き、争ひて第宅に據り、坊市の少年多く白を帶び號して劫掠す。賊偵ひて之を知り、灞上より復た京師を襲ふ。市人以て王師と爲し、歡呼して之を迎ふ。處存賊の迫る所と爲り、軍を收めて營に還る。賊怒り、兩市の丁壯七八萬を召集して之を殺し、血の流ること渠と成る」と。此れも亦た一大事なり。新書は載せず。

### 【語注】

○舊書其の死……『舊唐書』卷五十一列傳一后妃上の和思趙皇后傳に、「中宗和思皇后趙氏、京兆長安人。……中略……中宗爲英王時、納后爲妃。既而妃母公主得罪、妃亦坐廢、幽死於內侍省。……中略……神龍元年、贈后諡爲恭皇后、贈瑰左衛大將軍。及中宗崩、將葬於定陵、議者以韋后得罪不宜祔葬。於是追諡后爲和思、莫知瘞所。行招魂祔葬之禮。太常博士彭景直上言、古無招魂葬之禮、不可備棺槨、置輜鷺京。宜據漢書郊祀志葬黃帝衣冠於橋山故事。以皇后禕衣於陵所寢宮招魂、置衣於魂輿、以太牢告祭、遷衣於寢宮、舒於御榻之右、覆以夷衾而祔葬焉。從之」とある。○后崩ずる……

『舊唐書』卷五十二列傳第二后妃下順宗莊憲皇后王氏に、「元和十一年三月、崩於南內之咸寧殿、諡曰莊憲皇后。初、太常少卿韋纁進諡議、公卿署定、欲告天地宗廟。禮院奏議曰、『謹按曾子問、「賤不誅貴、幼不誅長、禮也。」古者天子稱天以誅之、皇后之諡、則讀於廟。江都集禮引白虎通曰、「皇后何所諡之、以爲於廟。」又曰、「皇后無外事、無爲于郊。」傳曰、「故雖天子、必有尊也。」準禮、賤不得誅貴、子不得爵母。所以必諡于廟者、諡宜受成於祖宗、故天子諡成于郊、后妃諡成于廟。今請準禮、集百官連署諡狀、讀于太廟、然後上諡於兩儀殿。既符故事、允合禮經。』從之。初稱諡竝云莊憲皇太后、禮儀使鄭綱奏議、秦・漢已來、天子之后稱皇后、母稱皇太后、祖母稱太皇太后、崩亦如之。加『太』字者、所以別尊稱也。國朝典禮、皆依舊制。開元六年正月、太常奏昭成皇太后諡號、以牒禮部、禮部非之。太常報曰、『入廟稱后、義繫於夫。在朝稱太后、義繫於子。』此載於史冊、垂之不刊。今百司移牒及奏狀、參詳典故、恐不合除『太』字。如諡冊入陵、神主入廟、卽當去之」と有る。○『舊唐書』卷百四封常清傳の條。○新書の之を……『新唐書』卷百三十五封常清傳に「敗書聞、帝削常清官、使白衣隸仙芝軍效力。仙芝使衣黑衣監左右部軍。及邊令誠以詔書至、示之、常清曰、『吾所以不死者、恐汙國家節、受戮賊手。今死乃甘心』。始、常清敗、徑入關、欲見上陳討賊事。至渭南、有詔赴潼關。常清憂懼、爲表以謝、且言、『自東京陷、三遣使表論成敗、不得對』。又言、『臣死後、望陛下無輕此賊、則社稷安』。至是臨刑、以表授令誠而死。人多哀之」と有る。○香積寺の戰……『新唐書』卷一百三十八列傳第六十三李嗣業傳に、「至德二年九月、嗣業從廣平王收復京城。與賊大戰於香積寺北、西拒灤水、東臨大川、十里閒軍容不斷。嗣業時爲鎮西・北庭支度行營節度使、爲前軍、朔方右行營節度使郭子儀爲中軍、關內行營節度王思禮爲後軍。戈鋌鼓鞞、震曜山野、距賊軍數里、列長陣而待之。賊將李歸仁初以銳師數來挑戰、我師攢矢而逐之。賊軍大至、逼我追騎、突入我營、我師鬪亂。嗣業謂郭子儀曰、今日之事、若不以身啖寇決戰於陣、萬死而冀其一生。不然則我軍無子遺矣。嗣業乃脫衣徒搏、執長刀立於陣前大呼、當嗣業刀者人馬俱碎、殺十數人、陣容方駐。前軍之士盡執長刀而出、如牆而進。



嗣業先登奮命、所向摧靡。是時、賊先伏兵於營東。偵者知之、元帥廣平王分回紇銳卒、令擊其伏兵、賊將大敗。嗣業出賊營之背、與回紇合勢表裏夾攻、自午及酉、斬首六萬級、填溝壑而死者十三三」とある。○長安を收め……『新唐書』同上下文に、「嗣業與子儀遇賊於新店、與之力戰、數合、我師初勝而後敗。嗣業遂急應接。回紇從南山望見官軍敗曳白旗而下、徑抵賊背、穿賊陣、賊陝西北角先陷。嗣業又率精騎前擊、表裏齊進、賊衆大敗、走河北。子儀遂收東都」とある。○梨樹園に盟……『舊唐書』卷一百三十四列傳第八十四渾瑊傳に、「三年、吐蕃入寇、至鳳翔、爲李晟邀擊之、又襲破其摧沙堡、吐蕃深恨之。尙結贊入寇、陷我鹽・夏二州、以兵守之。欲長驅犯京師、而畏瑊與李晟・馬燧、欲陰計圖之。乃卑詞遜禮告馬燧、請重立盟誓、則蕃軍引去、德宗不許。馬燧自入朝言之、上乃令崔翰入蕃報結贊、言還我鹽・夏、則許同盟。結贊謂翰曰、『清水之會、同盟人少、是以和好輕慢不成。今蕃相及元帥已下凡二十一人赴盟、靈州節度使杜希全・涇原節度使李觀皆和善守信、境外重之、此時須請預盟』翰約盟于清水、且先歸我鹽・夏二州、結贊曰、『清水非吉地、請會盟於原州土梨樹』又請盟畢歸二州。翰歸、備奏其事、神策將馬有麟奏曰、『土梨樹地多險、恐蕃軍隱伏不利、不如於平涼、其地坦平、且近涇州、就之爲便』乃定盟於平涼川。初、結贊請李觀、杜希全預盟、欲執之、徑犯京師。詔報之曰、『杜希全職在靈州、不可出境、李觀又已改官。今遣侍中渾瑊充盟會使』五月、瑊自咸陽入朝、詔授平涼盟會使、兵部尙書崔漢衡副之、司勳郎中鄭叔矩爲判官。瑊統兵二萬、又詔華州節度使駱元光以本鎮兵從瑊」と有る。○結贊の……『新唐書』卷一百五十五列傳第八十渾瑊傳に、「爲結贊所劫、副使崔漢衡以下皆陷、惟得免」と有る。○吉甫 國史を……『舊唐書』卷一百四十八李吉甫列傳に「八年十月、上御延英殿、問時政記何事。時吉甫監修國史、先對曰、「是宰相記天子事以授史官之實錄也。古者左史記言、今起居舍人是。右史記事、今起居郎是。永徽中、宰相姚璩監修國史、慮造膝之言、或不可聞、因請隨奏對而記於仗下、以授于史官、今時政記是也。」上曰、「聞或不修、何也。」曰、「面奉德音、未及施行、總謂機密、故不可書以送史官。其間有謀議出於臣下者、又不可自書以付史官。及已行者、制令昭然、天下皆

得聞知、卽史官之記、不待書以授也。且臣觀時政記者、姚璿修之於長壽、及璿罷而事寢。賈耽、齊抗修之於貞元、及耽抗罷而事廢。然則關時政化者、不虛美、不隱惡、謂之良史也」と有る。○潛建議し李……『舊唐書』卷一百七十九張潛傳中に、「李克用上章論訴曰、晉州長寧關使張承暉於當道錄到張潛榜竝詔曰、張潛充招討制置使、令率師討臣、兼削臣屬籍官爵者。臣誠冤誠憤。頓首頓首。伏以幸臣張潛欺天蔽日、廊廟不容。讒臣於君、奪臣之位。憑燕帥妄奏、與汴賊結恩。矯托皇威、擅宣王命、征集師旅、撓亂乾坤。誤陛下中興之謀、資黔黎重傷之困。臣實何罪、而陛下伐之。此則宰臣持權、面欺陛下」云々とある。○處存 驍卒……『舊唐書』卷一百八十二王處存傳に、「處存自渭北親選驍卒五千、皆以白繻爲號、夜入京城、賊已遁去。京師故人見處存、遮道慟哭、歡呼塞路。軍人皆釋兵、爭據第宅、坊市少年多帶白號雜軍。翌日、賊偵知、自灞上復襲京師、市人以爲王師、歡呼迎之。處存爲賊所迫、收軍還營。賊怒、召集兩市丁壯七八萬、併殺之、血流成渠」と有る。

#### 【現代語譯】

和思趙皇后傳について。『舊唐書』は、その死後埋葬した所が知れなかったので、(趙皇后の魂を)招魂して葬儀をあげ中宗の陵墓に合葬しようとした。彭景直が、「招魂は古來よりの法ではございません。漢書郊祀志にある黃帝の(生前身につけていた)衣冠を橋山に葬ったという故事に倣い、趙皇后の衣服を(中宗の陵墓に)合葬すべきであります」と上言した、と記載している。思うに、これは臨機應變に禮法を用いたということを備えているので書き記すべきことであるが、『新唐書』は記載していない。

順宗王皇后傳について、『舊唐書』は、「皇后が崩御された後、公卿は諡議を奉げて、天と地と祖先の靈に告げようとした。禮院が上奏して言うに、「曾子問に、「地位が低い者は地位が高い者を誅することをせず、年少者は年長者を誅する

ことをしない』とある。よって古は、天子に對しては天の名を借りて天子を誅し、皇后の諡については、宗廟で讀み上げた。江都集禮は白虎通を引用して、『皇后には、どの場所で諡をつけるのか。それは、廟で行う』とあります。又、『皇后は外事が無いため、郊でつけることはない』とあります。よって天子の諡は郊で決め、皇后の諡は廟で決めるのです』と。詔を出してこれに従った。又初め莊憲王太后と諡をした。禮儀使鄭綱は、開元中の昭成皇太后の諡號についての議論を引用して謂うに、『廟に入ってから后と呼ぶのは、その意味は夫と關係させるからである。朝廷にいる時に太と呼ぶのは、その意味は子と關係させるからである。今、役人達が文書を回しても、恐らく『太』の字を除くべきであろう。神主が廟に入ってから、始めてこの字を取るべきであると言った。』ということ載せている。この文章もまた、禮のことを議論している故事であるが、『新唐書』は載せていない。

封常清傳について、『舊唐書』は彼が刑に處される際に記した表の全文を載せている。このことは彼の心もちを明かにし、同時に彼が無實の罪であった事を記したからであろう。(しかし)『新唐書』がこの表を節録したのは一二語程度に過ぎない。簡明であると感じられるが、表に表された彼の心情がわからなくなってしまっている。

李嗣業傳について。香積寺の戦いで、李嗣業が長刀を振るって敵陣を陥したことは、もとより戦功第一である。長安を收復したのち、軍を進めて東都(洛陽)を奪還したとき、新店の戦いで、官軍はまた敗戦を喫し、郭子儀軍はもはや賊兵の包围する所となったが、李嗣業と回紇の軍が(敵を)挟み撃ちにしたことにより、賊軍はようやく引き去っていった。これらもまた李嗣業の大きな功績である。『舊唐書』はこのことを詳しくしているが、『新唐書』は反って記録していない。

渾瑊傳について、『舊唐書』が「渾瑊は會盟使となり、土番と梨樹園において盟約を結び、土番に劫かされた事」を記載するのは非常に詳しい。『新唐書』は但だ、「結贊に劫かされ、副使以下は皆陥ったが、惟だ渾瑊だけは免れることが

できた」と云うだけである。考えてみると、梨樹園での盟約を劫かされた事は、當時の一大事である。渾瑊は會盟使なので、この事は渾瑊傳には詳しく記載しないで、一體どこに詳しく記すのか。『新唐書』は渾瑊が失策した事を形すのを恐れたのであろう。だから、その詞を省略したにはかならない。

李吉甫傳については、『舊唐書』に「李吉甫が國史を監修した。（この時）皇帝が時政記はどのような事を記すのかと質問した。李吉甫は『それは宰相が天子の事を記し、そうして史官に授ける實録であります。昔、天子のことはを記すことを司った左史とは、つまり今の起居舍人のことであり、また天子の行いを記すことを司った右史とは、今の起居郎のことです。永徽年間に、宰相の姚璩が親密な仲で答辨することを憂慮し、聞くことがすくなくとも、天子に申し上げる際に（起居郎を）従わせて（やりとりを）朝堂で記録させ、そうして史官に授けることを求めた、ということがありました。これが今の時政記なのです』と答えた」とある。これは朝廷の制度に係わるものであるのに、『新唐書』はこの事跡を删っている。

張濬傳について。張濬が建議して李克用を討伐しようとした。『舊唐書』は、李克用の（無罪を訴える）訴表を全て記載し、張濬の平生輕率に過ぎる言行と、李克用が自ら驕って（朝廷に對し）恭順でないことを露わにしている。『新唐書』は（その訴表を）全て削除している。なんともはや張濬の爲に忌み避けたのであろうか、それとも李克用の爲に忌み避けたのであろうか。

王處存傳については、『舊唐書』に「黃巢は京師を占據していた。王處存は、勇敢な兵卒五千人を選び、白絹を（自軍の）目印として、夜に攻め入ったけれども、賊はすでに逃げ去っていた。兵士達は皆武器を捨て、屋敷を占領していき、ちまたの若者の多くは白色の物を身に付け、目印として強盜した。賊は様子を探ってこのことを知り、灞上から再度京師を襲った。町に住む人は王師と思ひ、喜んで迎えた。王處存は賊に迫られ、軍隊を收めて軍營に還った。賊は怒り、

兩市の成人男性七八萬人を召集して殺し、その血の流れる様子は川のようにであった」とある。これもまた一大事である。『新唐書』には載せていない。

(大兼健寛・新名主考美・關 清孝)